

境目・下西原遺跡

1. 所在地 高松市松縄町外1町地内
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成7年1月2日～3月31日
4. 調査面積 3,584m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会 山本英之
6. 調査の原因 都市計画道路木太鬼無線建設工事
7. 調査結果の概要

調査区は西から1～4工区に分割して実施した。1工区では古代末～中世初にかけての旧河道と不定形小区画水田が検出された。水田は小規模な畦畔により区画されており、検出枚数は3枚である。水田面には多数の足跡(人間、牛)が検出された。旧河道は最深部で約1mを側り、河床は凸凹である。河床からは先端部を加工した杭や、馬あるいは牛と考えられる頸の骨が出士した。

2工区では幅約10m、深さ10cmを測る浅い構状の凹地を検出し、弥生時代後期の土器片が多量に出土した。

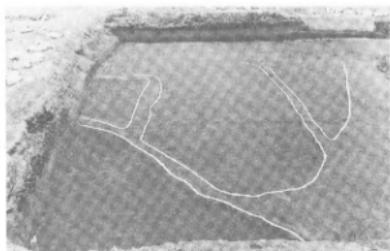
3工区で検出された遺構は、溝15条、土坑5基である。溝は調査区中央より西側に集中しており、南北方向に延びている。SD08は幅約7m、深さ1mを測る大規模な溝であり、堆積状態から2期に分けられる。出土土器よりI期は古墳時代後期、II期は弥生時代後期に比定される。幅4mを測るSD11を除くとその他の溝は幅20cmの小規模なものである。土坑は近世の肥料留めであろう。

8.まとめ

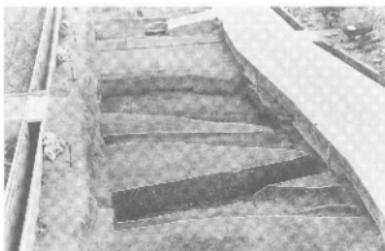
検出された遺構は溝、土坑、水田、旧河道であり、時代としては弥生時代の後期、古墳時代後期、中世初、近世と長期に渡っている。しかし、遺物は非常に少なくコンテナ10箱程度である。これは生産域としての性格を本遺跡が有していることと関係している。同時に遺構が南北に広がっており、周辺における発掘調査の必要があると考えられる。(山本)



第1図 遺跡の位置



第2図 水田畦畔出土状況



第3図 溝状遺構完掘状況

片山池瓦窯跡

1. 所在地 高松市西春日町1626番地
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成6年6月20日～8月31日
4. 調査面積 約17m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会 山本英之
6. 調査の原因 宅地造成
7. 調査結果の概要

遺跡は淨願寺山山南東斜面に位置し、片山池の北岸に当たる。本遺跡東の山裾には坂田廃寺が知られており、現在も礎石が残る。昭和16年に同窯跡の調査例があり、周辺にもさらに数基の存在が指摘されているが、現在では確認できない。本調査に併せて周辺で表採遺物の濃密な地点2ヶ所に確認トレンチを設定したが、ここでも遺構は確認できなかった。

発掘調査の結果、遺跡は燃焼室、隔壁、焼成室からなる半地下式有床式平窯である。窯壁は瓦片を心材としたスサ入り粘土で構築される。燃焼室は直径約2m深さ約40cmの浅い壠鉢状を呈し、焚口は開口部幅約50cmの両側に安山岩の人頭大割石を置いている。焼成室は幅・奥行きとともに約1.6m、残存高1.2mの直方体で、本来の高さは1.9m程度に復原できる。焼成室床面には丸瓦を心材としたロストル5条が作り付けられている。燃焼室と焼成室を隔てる隔壁は3本の分焰柱と4孔のアーチ形の分焰孔から成る。燃焼室・焼成室とも3回以上修復の痕跡がみられる。

出土遺物は、燃焼室、焼成室埋土中から出土した多量の平瓦を中心にして数点の丸瓦、軒平瓦（均正唐草文）、熨斗瓦の他、鶴尾片、瓦器片が出土している。丸瓦、熨斗瓦は製品と言うよりはむしろ壁体の心材として用いられたものである。鶴尾は、羽状の段形をもつ掌大の鱗部片で石井廃寺、極楽寺に類例がみられる。岡山の寒風糸に属し、白鳳期の所産と考えられる。鶴尾も同様に焚口の塊石横の燃焼室内壁に塗り込められていた。瓦器は焼成室床面付近の埋土中から出土し、西村、早島、樟葉産のものがみられる。

以上から、遺跡は隣接する坂田廃寺の瓦を供給しており、平安時代末の最終操業の後に放置埋没したものと考えられる。（山本）



第1図 遺跡の位置



第2図



第3図

汲仏 1号塚・瓦傑 1号塚

1. 所在地 高松市多肥下町1241番地
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成6年8月2~11日
4. 調査面積 約300m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会 山本英之
6. 調査の原因 太田第2土地区画整理事業
7. 調査結果の概要

当該区画整理事業に伴う整地工事に先立ち、事前の分布調査で所在が確認されていた2基の塚について確認調査を行った。

汲仏（こんぼとけ）1号塚

遺跡は水田の筆界に沿って削り残されたようになんでおり、裾部間際まで水田耕作による削平が及んでいる。平面台形を呈し、最短辺が4m、その他3辺が9mほどの規模である。高さは水田耕作面から1~1.1mを測る。斜面の傾斜は50°前後で直線的に立ち上がり、頂部は平坦になっている。

頂部で十文字に直交する2本の確認トレンチによると、土層は表面から砂利混じり現耕甘土層(10~50cm)、直径5~10cm程の河原石の純層、基底部付近に広がる黒褐色砂礫層に分かれれる。しかし、目立った遺物は確認できなかったことから、耕作地の開墾または井戸等の掘削に伴う排土の集積が現在まで残存したものと考えられる。

瓦礫（がらく）1号塚

現況では東西に長軸をもつ不整長方形を呈する。西側端部が、長辺とやや斜行する短辺をもって明瞭に二角を形成するのに対し、東側はやや南北に肥大し、東端部が弧状を呈するため、一見前方部を西に向けた前方後円墳を思わせる。東西主軸23m、後円部(?)径14m、高さ約1mを測る。墳丘斜面はいずれの箇所も30°~50°の傾斜で直線に立ち上がり、頂部は平坦である。

試掘トレンチは、主軸上と主軸に直交した2本を「キ」字状に設定した。この結果、覆土は河原石、バラスを混じる礫層で、墓壙等の主体部や埋葬施設は確認できなかった。遺物は、土堀脚部等が近現代の陶磁器に混じって見られ、遺跡としては認められなかった。(山本)



第1図 遺跡の位置

白山3遺跡

1. 所在地 三木町大字下高岡字白山
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成6年4月12日～7月17日
4. 調査面積 8000m²
5. 調査担当者 三木町教育委員会 石井健一
6. 調査の原因 厚生省健康福祉施設建設
7. 調査結果の概要

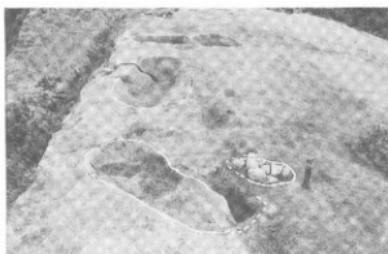
調査対象区は周知の遺跡が所在する白山の南側の尾根線上に位置し2区の調査区を設定して調査を行なった。S区において西斜面に竪穴住居を3棟、尾根上に土壙墓を6基検出した。うちS T01は小児頭大の河原石を配している。また、内部構造では両端に粘土塊がみられ、遺体を固定するのに用いたと思われる。N区では竪穴住居を3棟、焼土壙を4基、南北朝期と思われる居館の石垣を30mにわたり検出した。また、石垣に並行して柵列と思われるピット群も検出した。N区の斜面中央部では竪穴住居を3棟検出した。うちS H05は円形を呈し、4本の支柱穴をもつ。北半部において床面ならびに壁溝を検出した。また、幅50cm、深さ10cm前後の外周溝を持ち雨水を逃がしたと思われる。また、この外周溝は北部中央付近で幅60cmの途切れがあることと、床面北寄りの中央付近に梯子穴と思われるピットの確認したことから、北を出入口としていたようである。出土した遺物より弥生時代中期末から後期初頭に位置付けられる。

8.まとめ

弥生時代中期末の集落遺跡として知られていた白山3遺跡であるが、今回の調査により尾根、丘陵斜面部にも集落域が広がっていることが確認された。この集落は高地性集落の特徴を持ち、丘陵上で確認した土壙墓群とあわせて同地域における弥生文化の発展を知る上で極めて重要な位置を占める遺跡である。また、西方の鹿伏・中所遺跡との関係が注目される遺跡である。(石井)



第1図 遺跡の位置



第2図 土壙墓群完掘状況



第3図 SH05完掘状況

天神山古墳

1. 所在地 三木町大字鹿伏小字鹿伏東
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成6年10月31日
4. 調査面積 1000m²
5. 調査担当者 三木町教育委員会 石井健一
6. 調査の原因 花崗土採取
7. 調査結果の概要

天神山上に須恵器が散在していたことから古墳の存在は明らかにされていたが、その範囲については定かではなかった。今回の調査において古墳時代後期の古墳を3基、弥生時代終末期の土壙墓を13基検出した。1号墳は削平により天井石は失われていた。内部主体は横穴式石室で、床面には礫を敷き詰めている。出土した遺物、石室の拡張、礫床などから追葬が確認された。また墓道も確認しており、その上層断面から追葬のたびに再掘削が行なわれている。2号墳は横穴式石室であるが攪乱を受けているため詳細は不明であったが、下層より弥生時代終末期の土壙墓を10基検出した。また、3号墳は、出土遺物、礫床の状況、棺台の配置などから4回程度追葬が行なわれたと考えられる。

8.まとめ

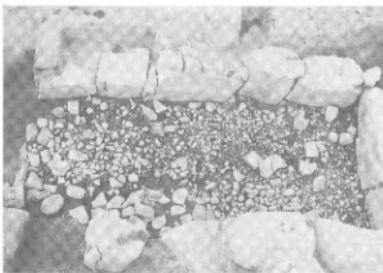
今回の調査により3基の古墳は6世紀中葉から7世紀前半にかけて相次いで築造されたと考えられる。天神山1号墳は未熟とも言える狭部道、追葬時の石室の拡張、埋葬時に礫床を朱染めにしたりなど地域的な特徴が見られる。また、土壙墓群は三木町北部の集落遺跡である鹿伏・中所遺跡との関連が注目され、同地域の歴史を解明する上で貴重な資料といえる。(石井)



第1図 遺跡の位置



第2図 1号墳石室検出状況



第3図 3号墳石室検出状況

山大寺池西丘上2・3号墳

1. 所在地 三木町大字上高岡大寺
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成6年7月17日～8月5日
4. 調査面積 700m²
5. 調査担当者 三木町教育委員会 石井健一
6. 調査の原因 災害復旧
7. 調査結果の概要

山大寺池の西側で、嶽山から東に延びる丘陵上に位置する。2号墳は主体部が失われていたため墳丘のみを確認した。墳丘は灰色、黄色、暗黄灰色砂質土を交互に突き固めた盛土により形成されている。出土須恵器から6世紀末の築造と考えられる。3号墳は2号墳の南に位置する。地滑りのため古墳の全容は明らかではないが、主体部を3基と周溝を西半部検出した。周溝内には葺石と思われる塊石の転落が確認された。溝は幅約140cm、深さ約40cmを測る。周溝内の遺物は極めて少ないが、鉢、甕等が出土しており弥生時代終末期と思われる。第1主体部は土層断面で幅85cm、深さ44cmを測る。

8.まとめ

今回の調査では、周知の2号墳の他、新たに3号墳を確認した。いずれも既に過去の工事、地滑り等により墳丘等が損壊していたため古墳の全容は把握できなかったが、3号墳は、方形台状墓の一種とみなすことができ弥生時代終末期の所産である可能性が高い。三木町内では初の検出例であり町内における同時期の墓制を解明する上で貴重な資料といえる。(石井)



第1図 遺跡の位置



第2図 2号墳墳丘土層断面



第3図 3号墳発掘状況

剣山古墳・天満遺跡

1. 所在地 三木町大字井戸字中代,
鹿庭字下所
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成6年8月9~16日
4. 調査面積 200m²
5. 調査担当者 三木町教育委員会 石井健一
6. 調査の原因 工場用地造成
7. 調査の概要

(1) 剣山古墳

古墳は町道三木多和線の西側、鹿庭一区北屋敷、標高100mの尾根端に位置する。頂上には小さなほこらが祀られている。その付近に石室の残骸と思われる上半身大の河原石を数個確認した。また、天井石を使用したと思われる石碑、灯籠の台など石室の石材の散在が確認された。

(2) 天満遺跡

遺跡は剣山古墳の南にある2本の尾根端に位置する。南尾根は南半分が数年前に土取りされており、その際に壺棺が出土している。また、石室の残骸と思われる4段に積まれた塊石群が検出された。北尾根では小児頭大の塊石群に混じって弥生土器片が出土した。

8. まとめ

調査の結果、剣山古墳は墳丘が削平されてはいるが、散在している石材から横穴式石室の可能性が高い。また、天満遺跡のうち北尾根については石室の残骸及び土師器が確認されたことから主体部は竪穴式石室であった可能性がある。出土した遺物より弥生時代終末期の墳丘墓であると思われる。(石井)



第1図 遺跡の位置



第2図 石材散布状況（剣山古墳）



第3図 塊石群検出状況（天満遺跡）

西土居遺跡

1. 所在地 三木町大字井戸字西土居
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成6年8月22日～10月30日
7年1月17日
4. 調査面積 3000m²
5. 調査担当者 三木町教育委員会 石井健一
6. 調査の原因 工場用地造成
7. 調査結果の概要

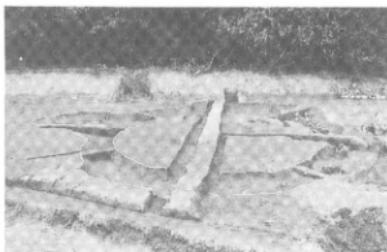
調査対象区は周知の遺跡である西土居古墳群の尾根を中心に広がる。今年度は調査対象地の約1万m²のうち約3000m²の調査を行なった。谷部では上層から中世の集落、中位から古墳時代中期末から後期前半を中心とする古墳群、下層から弥生時代中期から後期の集落、墳墓などを検出した。また、新たに6基の古墳を検出した。いずれも主体部は失われていたため、周溝のみ確認した。7号墳の周溝内では小児頭大の葺石の転落が多数確認され、東部、南部では須恵器片を数多く検出した。また、同一面で竪穴住居との切り合いが確認された。谷奥部では8号墳を検出し、周溝の南東部で杯、壺を中心とした須恵器片が数多く検出された。また、古墳群の下層からは弥生時代後期のビット群、土坑壺棺等を数多く検出した。

8.まとめ

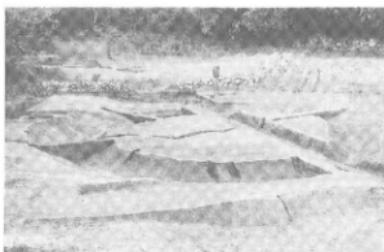
尾根筋上に6世紀後半から7世紀を中心とする6基の古墳の所在が知られていたが、今回新たに6基の古墳を確認した。出土遺物から5世紀末から6世紀中頃の築造と考えられ県内でも類例の少ない時期の古式群集墳である。7年度は弥生時代の集落を中心とする残り7000m²の調査を行う予定である。(石井)



第1図 遺跡の位置



第2図 7号墳完掘状況



第3図 8号墳完掘状況

田中南原遺跡

1. 所在地 三木町大字田中
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成6年12月26日

～7年1月15日

4. 調査面積 101m²
5. 調査担当者 三木町教育委員会 石井健一
6. 調査に至る経過

東田中地区において県中部土地改良事務所を事業主体とする県営圃場整備事業に伴い、香川県教育委員会の試掘調査により新たに発見された遺跡である。協議の結果、切土により保護措置が必要となる範囲において2区の調査区を設定して調査を行なった。

7. 調査の概要

S区の南寄りでSH01の西半部を検出した円形を呈し、長径5.61mを測る。検出段階において建築材と思われる炭化物の散乱が確認された。出土した遺物より弥生時代後期である。S区の北寄りでSH06を検出した。隅丸方形を呈し、4本の支柱穴を持ち、一部、壁溝が認められた。内部構造としてベッド状遺構を確認した。出土した遺物より古墳時代初頭である。また、直径50cm前後の古墳時代のピット群も検出している。

8.まとめ

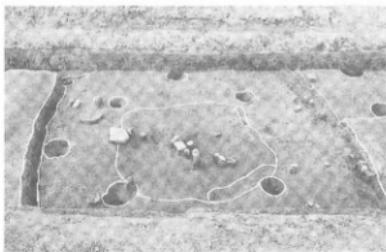
今回の調査により三木町田中地区における弥生時代中期から古墳時代後期にかけての集落遺跡が初めて確認された。また、弥生時代中期の集落は三木町南部では初めての集落遺跡として注目される。その後、弥生時代後期から古墳時代初め頃にかけて集落は継続して営まれている。また、丘陵上には同時期の墳墓群が多数確認されており、この集落遺跡との関係が注目される。その後、集落は一時途絶えて再び営まるのは7世紀代になってからである。この時期は周辺に横穴式石室をもつ古墳が多数知られており、それらと関係した集落と考えられる。(石井)



第1図 遺跡の位置



第2図 SH01炭化物検出状況



第3図 SH06造物出土状況

尾崎西遺跡

1. 所在地 大川郡長尾町東
2. 調査主体 長尾町教育委員会
3. 調査期間 平成6年6月6日～7月20日
4. 調査面積 1,721m²
5. 調査担当者 長尾町教育委員会 吹田健児
調査指導者 文化行政課 森下英治
6. 調査の原因 民間土地造成に伴う事前調査
7. 調査結果の概要

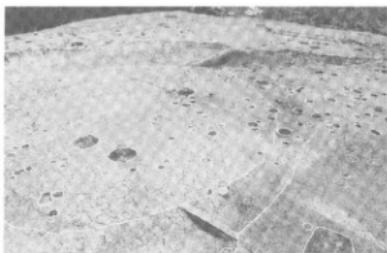
調査地は平成4年度に県道高松長尾大内線建設に伴って行われた尾崎西遺跡の隣接箇所である。調査の結果、南から北へ延びる尾根筋において、6世紀代の古墳5基、南北朝～室町期の集落跡を検出した。調査地の中央に位置する古墳は、直径約14mの円墳で、埋葬主体は削平されて遺存しないが、周辺の古墳と比べて、規模が大きいことから、中心的位置を占める古墳と考える。この古墳の西側斜面には県道調査で見つかった古墳から連続するように、直径7mほどの小規模墳3基が南北に連なっている。そのうち、1基には6世紀中葉ごろと推定される横穴式石室の痕跡が検出された。また、尾根の東側には一辺約6mの方墳周濠が検出された。隣接して検出した箱式石棺からは碧玉製管玉が多数出土した。中世の遺構は建物跡が主体で、一部区画溝等を検出した。県道調査時に見解が示された中世寺院「極楽寺」に関連する周辺遺構と考えられる。

8.まとめ

中心的位置を占める古墳では周濠から埴輪が出土している。出土埴輪は大川町大井5号墳等で出土している円筒埴輪に類似しており、6世紀前半の新相と推定される。周濠から出土する須恵器の最も古いものがその時期に該当する。当遺跡の古墳分布は今回調査した西尾根群と極楽寺東古墳を中心とする東尾根群に区分できる。東尾根群が6世紀後半以降の横穴式石室を埋葬主体とするのに対し、西尾根群は、今回の調査によって6世紀前半～中葉の古式横穴式石室や箱式石棺を埋葬主体とする墳墓形態であることが確認された。(森下)



第1図 遺跡の位置



第2図 西尾根群中央の円墳



第3図 西尾根群西斜面の横穴式石室墳

富田茶臼山古墳陪塚群

1. 所在地 大川郡大川町富田中石仏
2. 調査主体 大川町教育委員会
3. 調査期間 平成6年10月5日
～7年1月10日
4. 調査面積 100m²
5. 調査担当者 大川町教育委員会 萬木一郎
調査指導者 文化行政課 國木健司
6. 調査に至る経過と調査の経過

平成5年度の県営圃場整備に伴う試掘調査によって、史跡富田茶臼山古墳の前方部南西側の水田中より陪塚と推定される小型方墳（1号陪塚）が発見され、また同古墳の周濠西端ラインから西方約80mの位置でも円筒埴輪片を含む溝状遺構が検出されていた。いずれも工事の設計変更により現状保存される見通しであったが、今年度に至り1号陪塚についてさらに詳細な資料を得るために確認調査を実施することになった。調査は10月5日～12日まで行なったが、調査中にその北西側の水田中に多数の円筒埴輪片が散乱していることが確認され、その期間中に同地区の試掘調査を行なった。この調査によって新たに古墳の周溝とともに樹立した状態の円筒埴輪底部も検出されたことから、富田茶臼山古墳には複数の陪塚が存在していることが確実となった。この2号陪塚の発見により、5年度に発見されていた円筒埴輪片を含む溝状遺構も陪塚の可能性が高いと考えられたため、3号陪塚として再度保存協議対象に含めることにした。以上の3基の陪塚群は保存状態からみて2号陪塚が特に重要と考えられたが、地権者が宅地として造成を予定していたため、さらに詳細な協議資料を得るために12月5日から調査区を拡張して確認調査を実施した。

7. 調査結果の概要

(1号陪塚)

墳丘のほとんどが削平され周溝の一部が残存するにすぎない。主体部も残存していないため副葬品も不明である。周溝も北辺と南辺が残存するのみであったが、南から北に下る傾斜地に築造されているため両者の溝底レベルに約1mの比高差がみられる。したがって、残存していない西辺及び東辺については削平を受けているものと考えられるが、北辺及び南辺の西端部分は次第に浅くなっているために西辺については本来の存在状態が不明である。隅部など陸橋状に途切れていた可能性はある。北辺については幅1m前後、深さ10cm前後をはかり、西端は終結し



第1図 遺跡の位置

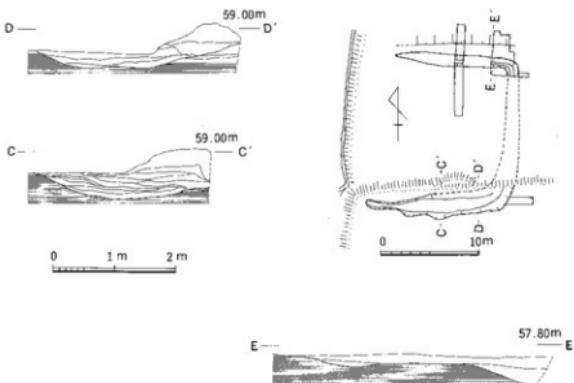
富田茶臼山古墳前方部



第2図 陪塚群調査区位置図

ているものの、東端はほぼ直角方向に屈曲し東辺へとつながる。南辺は東半部が幅2m、深さ30cm前後と大規模であるが、西半部は次第に狭くすぼまり、深さも10cm前後と小規模になる。西端部はやや北に向って屈曲気味に終息する。東端部は北に向って隅丸気味に屈曲しており北辺の屈曲部へと連結していたものと推定される。

周溝の屈曲部が確認されていることから墳丘の形状及び規模はほぼ特定しうる。墳丘は方墳で南北長は周溝の上端で約13m、下端で約14mをはかる。南辺の屈曲状況からみて墳丘は東西方向は15~16mと予想されることから若干東西方向に長い長方形墳であった可能性もある。墳丘はほとんどが削平されているが、南辺周溝北側の現在畦畔となっていた部分について40cmの厚さで一部盛土が残存していた。したがって、墳丘は地山整形後ほとんどが盛土によって形成されてい可能性が高い。



第3図 1号陪塚実測図

周溝の北辺の北側約1mには北に向って下る人為的な傾斜整形痕がみられた。このラインを東に延長すると、平成元年度の調査で富田茶臼山古墳の周庭帯と推定されたテラス部の外縁ラインにつながるため、同古墳築造時の地山整形範囲外縁部を検出したものと推定される。

出土遺物は円筒埴輪のみである。北辺の周溝からもその破片が少量出土しているが、南辺周溝からの出土が大半を占める。本来の位置を留めるものはないが、周溝底から浮いた状態の出土であり、墳頂部から転落したものと推定される。

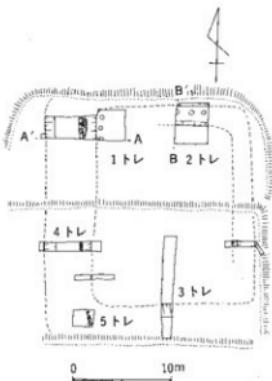
(2号陪塚)

耕作土を除去した段階で円筒埴輪片が多数散乱している状態であったため、削平を受けていることは確実であった。調査は周溝及び主体部の残存状況を確認することが主眼であった。

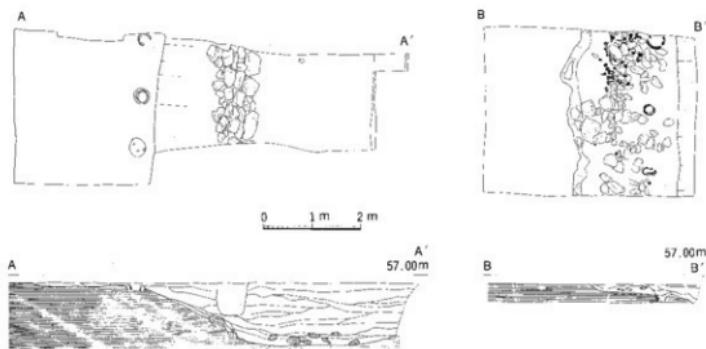
トレンチは6本設定した。1トレンチからは上端幅5m、深さ1.3mの周溝を検出した。その内

側斜面部は基底部に人頭大のやや大型の塊石を一列に配し、その上方は小兒頭大の小型塊石を内側に粘質土の裏込めを施しながら固定した葺石が3～6段残存していた。斜面部の傾斜角度は28°前後である。周溝底は幅2.4にわたって平坦に整形されており、埋土最下層からは転落石と円筒埴輪片が折り重なるように出土した。周溝外側の斜面部は幅70cm、深さ20cmほど上昇するのみで内側ほどの比高差を持たない。葺石も検出されなかった。内側斜面部を界り切ったところからは内側に約2m幅のテラス面がみられた。このテラス部分と斜面部の境界にあたる位置からは円筒埴輪の基底部が樹立した状態で3本出土した。径35～40cmの円形ピット中に基底部を10cmほど埋設する樹立方法で1～1.3mおきに配置されている。境を接するような配置であった富田茶臼山古墳との間には樹立間隔に差異がみられる。

2トレンチは古墳の北辺に相当する位置に設定した。トレンチ北端付近で北に向って下る傾斜部を検出しておき、位置・レバールからみて墳丘斜面部に相当する。斜面部の内側（南側）はやはり2mにわたってテラス面が形成されており、小塊石や円筒埴輪片が多数散乱した状態で検出さ



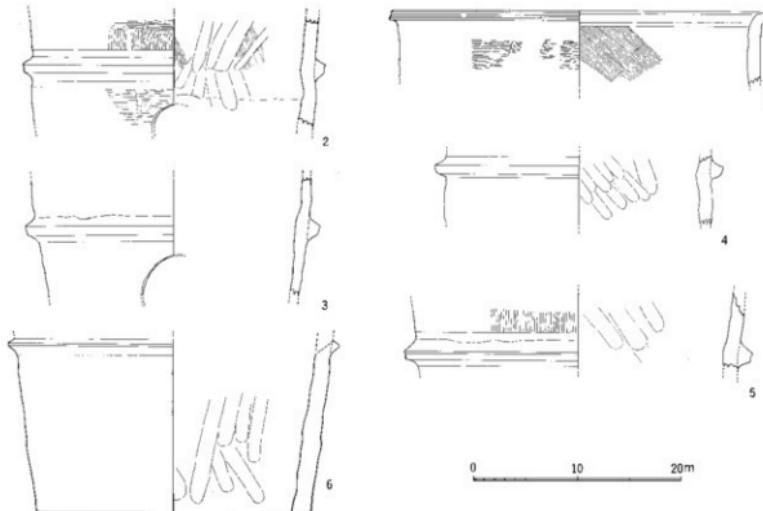
第4図 2号陪塚平面図



第5図 2号陪塚トレンチ実測図

れた。このテラス面北端付近の斜面部に近い位置からは1.3~1.5mおきに配された円筒埴輪基底部が3本樹立された状態で出土している。テラス南端のトレンチ中央にあたる位置には約20cmの比高差をもつ斜面部がみられた。その下端には人頭大の塊石が配されており、石材を抜き取った痕跡も見られたことからみて、埴丘上段斜面部の基底部付近に相当するものとみなされる。とすれば2号陪塚は2段築成で埴丘2段目にも葺石が施されていたことになる。テラス面上に多数散乱していた塊石群はその転落石とみなすことができる。

3トレンチでは南端付近から古墳の南側周溝部を検出したが、外側の立ち上り部が確認されず、幅は不明である。深さは約30cmをはかる。埴丘側の斜面には基底部に大型塊石を配するなど他と同様の葺石構築が行なわれている。4トレンチは1トレンチ検出の周溝の延長部を検出したが、両者の周溝底に約1.2mの比高差がみられる。位置的に10mほどしか離れていないトレンチであ



第6図 2号陪塚出土埴輪実測図

り、周溝が連続しているとすれば底面がかなりの傾斜をもつことになるため、両トレンチ間には陸橋等の施設が存在している可能性が高い。5トレンチからは周溝底の埴丘基底部に配された列石を検出している。緩く弓を描くように配されており、埴丘のコーナーを検出したものとみなさ

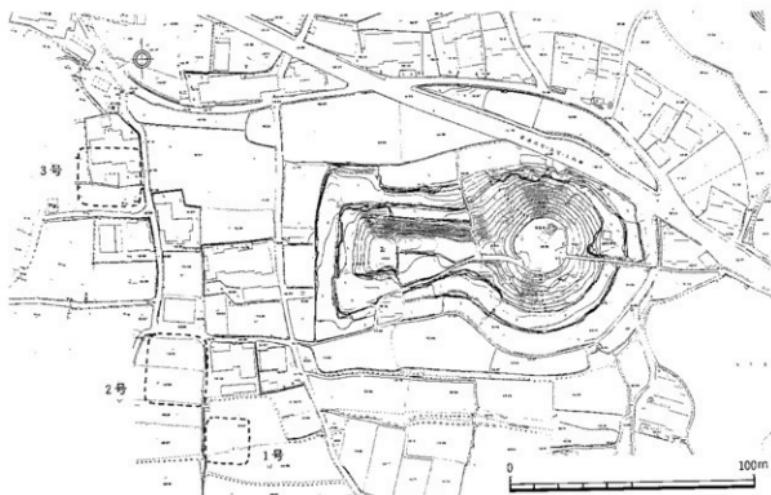
れる。6トレンチからは1段目の肩等を検出している。

以上の結果から墳丘は2段築成の方墳とみなされるが、北辺及び東辺の基底部が未確認のため正確な墳丘規模は不明である。1段目の肩の位置からみて現在の水田畦畔がほぼ墳丘基底部ラインを反映しているものと推定されるため、この位置で計測すると南北約24m、東西約20mとなり、南北方向に長い長方形墳となる。主体部は削平を受けており内容は不明である。

1, 2トレンチからは多量の円筒埴輪片が出土している(第6図)。1は口縁部片で端部を外方へ屈曲させており、端面には強いヨコナデによる凹面が形成されている。外面に2次調整のヨコハケ、内面にナナメハケが残る。2, 3は体部片でいずれも円形透し孔がみられる。1の外面は1次調整のタテハケ後ヨコハケを施している。内面はナナメハケ後ユビナデを行なっている。6は底部で底径26.6cmをはかる。

(3号陪塚)

5年度の試掘調査で南北向に直線的に延びる周溝を検出していたが、陪塚の可能性が高まったため宅地の西側に隣接して構築される水路建設予定地の事前調査を行なった。その結果、先の溝に連続すると考えられる幅約2mの東西方向の溝を検出した。そのため、1, 2号と同様方形あ



第7図 陪塚配置図

るいは長方形のマウンドをもつ古墳であることが確実となった。南辺及び東辺は昨年度の試掘調査でも確認されていないが、現在の地割からみて現在の農道付近に求めるのが妥当であろう。とすれば一辺20~24m程度の規模を持つものと推定される。

8.まとめ

2ヵ年にわたる調査の結果、富田茶臼山古墳には3基の陪塚が存在していることが明らかになった。陪塚としての認定には①従属性、②同時代性、③計画性の3点について実証しておく必要があるとされるが、①の従属性については墳丘規模のみの比較であるが、全長139mの前方後円墳である富田茶臼山古墳との格差は明らかであろう。②については3基ともに出土円筒埴輪が富田茶臼山古墳出土品と異なる特徴を持つものではなく、ほぼ同時期に築造されたものとみなされる。③の計画性については以下の諸点について認められる。

- (a) 1号陪塚の北辺ラインが富田茶臼山古墳周庭帶外縁ラインに接している。
- (b) 1号陪塚の西辺ラインを北に延長すると2号陪塚東辺ラインにつながる。このラインは北に向ってさらに50mほど直線的に延びる地境につながるが、このラインは富田茶臼山古墳の前方部先端ライン及び周濠外縁ラインに平行する。したがって、富田茶臼山古墳の周庭帶外縁ラインを示している可能性もある。
- (c) 2号陪塚西辺ラインを延長すると3号陪塚東辺ラインにほぼつながる。
- (d) 富田茶臼山古墳前方部南側の基底部ラインを延長すると2号陪塚の中心点に合致する。
- (e) 富田茶臼山古墳の後円部南端地点と前方部南西隅部を結ぶラインを西に延長すると2号陪塚北辺ラインにつながる。
- (f) 3基いずれも4辺がほぼ東西南北を志向しているが、この方位は富田茶臼山古墳の主軸方位に直・平行するものである。

他にも計画性が伺える部分は認められるが、以上の諸点のみでも富田茶臼山古墳と3基の陪塚群の間には配置に計画性が認められ、一方で3基の陪塚群相互の間にも計画性を認めうる。以上の諸特徴から陪塚であることは確実といえるが、逆に発掘調査によって3点が全て確認された希少な例であることから今後陪塚研究の基本資料となりうるであろう。

陪塚は古墳時代中期を中心とした時期に大王墓級の古墳にみられるもので、それを持つ古墳の分布の中心は畿内にあることはいうまでもない。畿内以外では調査によって実証された例は少ないが、可能性が高いものとして岡山県造山古墳、作山古墳、両宮山古墳、山口県白鳥古墳、兵庫県壇場山古墳、車塚古墳、玉丘古墳、三重県殿塚古墳、御墓山古墳等が知られている。いずれも各地の最有力首長墓であり、四国内では富田茶臼山古墳以外に確実な例はない。これらの陪塚をもつ各地の古墳について同様の政治的評価を与えることは難しく、地域史の中での意義をまず検討しておく必要がある。

富田茶臼山古墳については地域色豊かな古墳時代前期の讀岐にあって、畿内との交流によって

地域色をいち早く脱却しつつあった津田湾沿岸のあとを受け、墳丘形態・墳丘築成法などにより畿内色が強まつた古墳とみなされる。政治的には畿内政権との密接な関係のもとに築造されたものと考えられるが、陪塚の存在はその関係がより緊密であったことを示すものである。富田茶臼山古墳以後は首長墓系譜がみられず甲冑をもつ小円墳の築造が顕著となる点も、その被葬者の性格を考える上で重要であり、畿内政権の勢力浸透がこの段階で確実に果たされたことを示しているものと思われる。ほぼ中期を通じて陪塚をもつ首長墓の系譜がみられる岡山県や三重県との違いは明らかであり、陪塚の存在によって畿内政権との関係を一元的に捉えることが難しいことを示している。畿内政権による地方支配方法の違いや特徴を検討する有力な資料となることは間違いないであろう。

地域政権の中では、陪塚被葬者は大首長の支配機構を支える官僚的な実務担当者であったといわれており、その存在は富田茶臼山古墳の被葬者によって讃岐地方においても畿内と同様の権力機関の整備が行なわれていたことを示すものである。したがって、これらの陪塚群は地域政権の実態や整備過程を検討するうえで重要なものといえる。(國木)



第8図 1号陪塚南辺周溝



第9図 2号陪塚全景（南から）



第10図 2号陪塚1トレンチ



第11図 2号陪塚2トレンチ

津田町鶴羽発見の備蓄銭

1. 所在地 大川郡津田町鶴羽
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 平成6年7月27日
4. 調査担当者 文化行政課 森下英治
5. 整理担当者 香川大学 稲田道彦・川口敏・片桐孝浩（整理協力）
6. 調査の経緯・経過

平成6年7月、香川大学稲田助教授（当時）が当該地周辺を踏査した際、新造當の祠において備前焼壺に入った備蓄銭が奉納されている状況が確認され、同大学丹羽祐一教授を通じて県教委に連絡が入った。現地を確認し、地元の方々に経緯等を窺ったところ、平成2年頃に隣接道路工事の最中に出土し、地元有志で掘り出して祠に奉納したことであった。

出土品を観察すると、鎌倉～室町期の備前焼壺に漢代～元までの中国銭が認められ、中世期の備蓄銭であることがわかった。出土品の重要性を説明したところ、文化財として適切な保存管理が必要である点で合意し、所定の手続きを行い、地元の方々の同意のもとに香川大学稲田助教授が古銭の内容を整理し、県教育委員会が保管することとなった。整理にあたっては、香川大学大学院生川口敏氏、また片桐孝浩氏のご協力を得た。貴重な文化財の調査・保管にご理解・ご協力をいただいた地元の方々、津田町教育委員会、上記各氏に謝意を表するものである。以下、整理結果の報告を掲載する。

（森下）



第1図 遺跡の位置

1-古文-1		2-古文-1	
3-真書-1	3-真書-2	3-真書-3	3-真書-4
3-真書-5	3-真書-6	3-真書-7	3-真書-8
3-真書-9	3-真書-10	3-真書-11	3-真書-12

7. 古銭について

津田町から出土した古銭には、日本で模範された可能性のある貨幣も若干数混じっているが、全てが中国錢などの文字を印字した外国錢であった。皇朝十二錢といわれる日本の貨幣は一枚もなかった。貨幣の総数は7,431枚であった。そのうち腐食などで銭面の識別できなかったのは91枚であった。また巷間へ流通などにより、文字が読めないほど磨耗している貨幣はごく少かった。これらの貨幣は中国からの渡来錢のうちでも、市場に長期間流通していない比較的新しい貨幣が壺に入れられていたのではないかと推測した。また数十枚が鋳びて重なってくついている固まりがいくつもあった。これは壺の中で、ある枚数の単位にくくられている縁錢（サシセン）の状態であったであろうと推測するが、何枚で一縁を作っていたのかは分からなかった。

今回の出土貨幣のうち最も古いのは前漢時代の四銖半両である。初鋳年がB.C.175年であるから他の貨幣に比べてとびぬけて古い。次に古いのは後漢時代のA.D.24年に鋳造された五銖が2枚、少し遅れるA.D.581年の隋時代の小型の五銖が4枚出土している。四銖半両や五銖などの古い時代の貨幣はその後に鋳造された貨幣に比べて孔が大きい。大きさが他の貨幣と同じなので縁錢に混ぜて使われたものと思う。

680枚出土した開元通寶は鋳造の時期により3種類に区分される。唐時代初めの621年に初鋳されたものと、同じく唐時代の845年に補鋳された貨幣で紀地錢とか会昌開元通寶とか呼ばれる貨幣、さらに960年の南唐において鋳造された貨幣である。出土貨幣の数では初期に鋳造されたものが多く、650枚を数えた。この開元通寶は浮き彫りされている貨幣の字体にヴァリエーションが多い。紀地錢はやや小型で、背側に鋳造地の地名の一文字が浮き彫りされている。

北宋時代の貨幣が今回の出土貨幣の87%と圧倒的数量を誇っている。北宋貿易で中国から輸入されたものと考えられる。宋通元寶から宣和通寶までの貨幣である。そのうち962枚の皇宋通寶が最多出土である。次いで868枚の元豊通寶である。両者とも貨幣の文字は多くのヴァリエーションを有している。ただし大平興寶は丁朝（現在のベトナム、当時は安南）の貨幣で、中国の太平通寶と似るが、鋳造技術は劣り、粗悪品である。どのようなルートで津田まで渡來したものか興味深い。

その後の南宋時代の貨幣は種類は多いがその数において減少する。今回の出土では、金で鋳造された正隆元寶を除く建炎通寶から咸淳元寶折二錢までの205枚である。そのうち淳熙元寶の51枚が一番多い。南宋時代には北宋時代に比べると貨幣の鋳造量が少なかったという。

今回の出土貨幣では元時代の2枚の至大通寶（1310年に初鋳）が最も新しい貨幣である。津田町鶴羽中谷集落に何らかの理由で埋められたのは1310年より後であることがわかる。鈴木公雄（1992：『出土備蓄錢と中世後期の錢貨流通』「史学」61, 225-280.）によると、鈴木は日本の各地で1,000枚以上出土した中国古錢の最新錢の年号を調べ、その年号の現れ方により8つのタイプに分けている。鈴木の分類でいうと、津田町の出土は2番目のタイプに当たり、日本国内で出土

した渡来錢では早い時期に埋納された中國古錢であることがいえる。

誰がこれだけ大量の貨幣を蓄蔵し、何の理由でこの地に結果的に埋めることになったのか、また当時の現地の様子などはよくわからない。地元では近くの祠の宝地大権現に平家が再起を期して宝を埋めたとの伝承があるが、至元通寶の鋳造年との関係より年代的に齟齬があるように思われる。(稻田・川口)

8. 備前焼壺について

前述した7,431枚の古錢は、備前焼の壺と味噌壺に入れられた状態で小祠に供えられていた。この備前焼壺は、平底の底部からやや内湾しながら立ち上がり、肩部できつく内湾し頸部にいたる。頸部は直線的にやや外方に延び、口縁端部は玉縁状に丸く終わらせる。全体に横なで調整され、底部は未調整で「ゲタ痕」が認められる。体部最下部には3条のヘラ描き沈線が、肩部には1単位5~6条の櫛描き沈線が3段めぐっている。時期は間壁編年のIVA期(14世紀後半~15世紀前半)¹⁾である。また、出土最新錢(至大通寶 初鑄1310年)からの時期区分では2期(14世紀第3四半期)に当たり²⁾、備前焼壺の年代観と矛盾しない。したがって古錢の埋納時期は14世紀後半頃と推定できる。(片桐)

註1 間壁忠彦・間壁茂子「備前焼研究ノート(1)・(2)・(3)」『倉敷考古館研究集報第1・2・5号』

1966

2 永井久美男「埋蔵時期の推定と最新錢」『中世の出土錢』1994



第4図 備前焼壺実測図



第5図 備前焼壺

番号	錢貨名	王朝	初鑄年	枚数	真書	行書	草書	篆書	隸書
1	四銖半兩	前漢	B C 175	1				1	
2	五銖	後漢	A D 24	2				2	
3	五銖	隋	A D 581	4				4	
4	開元通寶	唐	621	650	650				
5	乾元重寶当十錢	唐	758	29	29				
6	乾元重寶当五十錢	唐	759	1	1				
7	開元通寶紀地錢	唐	845	20	20				
8	周通元寶	後周	955	6	6				
9	唐國通寶	南唐	959	14	1			12	1
10	開元通寶	南唐	960	10	6			4	
11	宋通元寶	北宋	960	25	25				
12	大平興寶	丁	970	1	1				
13	太平通寶	北宋	976	76	76				
14	淳化元寶	北宋	990	50	18	14	18		
15	至道元寶	北宋	995	122	51	43	28		
16	咸平元寶	北宋	998	126	126				
17	景德元寶	北宋	1004	164	164				
18	祥符元寶	北宋	1009	198	198				
19	祥符通寶	北宋	1009	118	118				
20	天禧通寶	北宋	1017	156	156				
21	天聖元寶	北宋	1023	353	210			143	
22	明道元寶	北宋	1032	30	11			19	
23	景祐元寶	北宋	1034	110	70			40	
24	皇宋通寶	北宋	1038	962	529			433	
25	至和元寶	北宋	1054	80	53			27	
26	至和通寶	北宋	1054	38	19			19	
27	嘉祐元寶	北宋	1056	85	49			36	
28	嘉祐通寶	北宋	1056	167	99			68	
29	治平元寶	北宋	1064	139	64			75	
30	治平通寶	北宋	1064	26	10			16	
31	熙寧元寶	北宋	1068	697	368			329	

表1 津田町出土の中国古銭の書体別枚数(1)

番号	錢貨名	王朝	初鑄年	枚数	真書	行書	草書	篆書	隸書
32	元豐通寶	北宋	1078	868		485		383	
33	元祐通寶	北宋	1086	670		331		339	
34	紹聖元寶	北宋	1094	287		151		136	
35	元符通寶	北宋	1098	118		57		61	
36	聖宋元寶	北宋	1101	290		133		157	
37	大觀通寶	北宋	1107	94	94				
38	政和通寶	北宋	1111	326	176			150	
39	宣和通寶	北宋	1119	20	10			10	
40	建炎通寶	南宋	1127	2				2	
41	紹興元寶折二錢	南宋	1131	2	2				
42	正隆元寶	金	1157	7	7				
43	淳熙元寶	南宋	1174	51	51				
44	紹熙元寶	南宋	1190	12	12				
45	慶元通寶	南宋	1195	16	16				
46	嘉泰通寶	南宋	1201	9	9				
47	開禧通寶	南宋	1205	7	7				
48	嘉定通寶	南宋	1208	36	36				
49	大宋元寶	南宋	1225	2	2				
50	紹定通寶	南宋	1228	18	18				
51	端平元寶	南宋	1234	1	1				
52	嘉熙通寶	南宋	1237	4	4				
53	淳祐元寶	南宋	1241	11	11				
54	皇宋元寶	南宋	1253	4	4				
55	開慶通寶	南宋	1259	1	1				
56	景定元寶	南宋	1260	9	9				
57	咸淳元寶	南宋	1265	12	12				
58	咸淳元寶折二錢	南宋	1265	1	1				
59	至大通寶	元	1310	2	2				
錢名判読不能				91					
合計				7431	3613	1214	46	2466	1

表2 津田町出土の中国古銭の書体別枚数(2)

2. 財香川県埋蔵文化財調査センター発掘調査概況

県道事業に伴う調査状況

1. 調査の概況

平成6年度に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが受託した県道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（県道埋蔵文化財調査業務）は、4件・4遺跡である。

県道高松志度線道路改良工事に伴う高松市小山・南谷遺跡の発掘調査は、12,000m²を調査対象地として、平成6年4月1日から平成7年3月31日までの調査期間で実施した。発掘調査の手法は工事請負方式とし、工期は平成6年4月22日から平成7年2月28日までを要した。

小山・南谷遺跡は香川県教育委員会の平成4年度の試掘調査で発見された遺跡である。平成5年度に10,000m²を発掘調査し、今年度に継続されたものである。

調査対象地は東西にのびる道路予定地で、昨年度調査できなかった部分（II-4・5区）と、昨年度調査の西側にあたる部分（IV区・V区）を発掘調査した。地形は東（I区）から西（V区）に向かって緩く下る傾斜地で、今年度の調査地は緩傾斜地の下方にあたる。

発掘調査の結果、II区とV区では縄文時代の自然河川跡が検出され、縄文時代後期前半の永井I・II（津雲A式・彦崎K I式）が出土した。この時期の縄文土器は、落とし穴と考えられる昨年度調査の土坑からも出土しており、付近にこの時期の縄文時代集落が存在することを物語っている。

IV区では溝から弥生時代末頃の土器等が出土し、V区からは平安時代（10世紀前後）の掘立柱建物跡、木組み井戸枠や曲物をもった井戸、鎌倉時代（13世紀頃）に埋まった溝などが検出され、墨書き器、土馬等も出土した。

今年度の発掘調査は用地の関係で、年度当初の予定面積を調査できず、8,303m²を発掘し、平成7年度に継続されることになった。

県道石田東志度線道路改良工事に伴う寒川町本村・横内遺跡の発掘調査は、直営方式により、1,500m²を調査対象地として、平成7年4月1日から6月30日まで実施した。調査地は南北約150mの道路予定地で、周囲は南北に緩やかに下る水田地帯である。

発掘調査は、北から南に向かってI区からIV区に分けて実施し、II区で北側に庇をもつ平安時代後期の掘立柱建物跡1棟、III区で重複した平安時代の掘立柱建物跡2棟、IV区で奈良時代末頃の掘立柱建物跡3棟（うち2棟は重複）などを検出した。いずれもほぼ東西に主軸をおく。これらの建物は東西及び南北の溝で区画された屋敷地をもつ可能性があるが、調査範囲が狭いため、明確にはできなかった。

県道高松志度線道路改良工事に伴う志度町八丁地遺跡の発掘調査は、当初計画では9月1日から実施する予定であったが、工事との調整の結果、発掘調査を早め、4,500m²を調査対象地と

して、平成6年7月1日から平成7年3月31日までの調査期間で実施した。発掘調査は、高松市小山・南谷遺跡と同じく工事請負方式で、工期は平成6年7月7日から平成7年2月17日を要した。

八丁地遺跡は、平成5年5月に香川県教育委員会が分布調査を行い、同年9月21日から31日にかけて試掘調査を実施したことにより発見された。さらに、道路予定地の南側水路と北側擁壁部分の工事を急いだため、同年11月10日から12月10日まで、香川県教育委員会がその部分の発掘調査を実施し、残りの部分の発掘調査を財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが受託したものである。

今年度の調査地は玉浦川の西端から西方の丘陵までの、東西にのびた道路予定地で、東西約270mの範囲である。調査地は西から東に向かってI区～VI区に分け、発掘を実施した。

発掘調査の結果、II区～V区にかけて、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器・製塙土器を出土した溝・土坑等を検出したほか、全面にわたって中世の遺構・遺物を検出した。

今年度の調査では4,419m²を発掘したが、用地の関係で165m²が残り、この部分は7年度に継続して発掘調査されることとなった。

県道高松長尾大内線道路改良工事に伴う高松市十川東・平田遺跡の発掘調査は、当初、平成6年7月1日から平成7年3月31日まで実施する予定であった。しかし、志度町八丁地遺跡の調査を先行させたため、平成6年9月1日から平成7年3月31日までの調査期間となったものの、当初予定した8,000m²を終了することができた。

遺跡周辺は南の低丘陵から北にのびた微高地が発達した水田地帯である。調査地は北西から南東にぬける道路予定地の、長さ約350mの範囲で、西から東に向かってI区～VII区に区分し、直営方式で調査した。

調査の結果、I区からII区にかけて中世の掘立柱建物跡、III区から弥生時代末頃の竪穴住居跡を検出し、VI区から掘立柱建物跡、弥生時代と思われる竪穴住居跡、V区から掘立柱建物跡などを検出した。また、弥生時代と中世の遺構・遺物がほぼ全域で発見されたほか、ナイフ形石器・有舌尖頭器も検出された。

2. 遺跡別発掘調査結果の概要

遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間	遺構	遺物
小山・南谷遺跡	高松市 高松町・新田町	8,303	6. 4. 1 ~ 7. 3. 31	縄文時代自然河川跡・弥生時代溝・平安時代掘立柱建物跡・井戸・溝等	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・墨書き土器・土馬等
本村・横内遺跡	大川郡 寒川町石田東	1,500	6. 4. 1 ~ 6. 6. 30	奈良時代掘立柱建物跡・溝・平安時代掘立柱建物跡・溝・土坑等	土師器・須恵器等
八丁地遺跡	大川郡 志度町大字志度	4,419	6. 7. 1 ~ 7. 3. 31	弥生時代溝・土坑・古墳時代土坑・中世溝・ビック	弥生土器・土師器・須恵器・製塙土器・瓦器等
十川東平田遺跡	高松市 十川東町	8,000	6. 9. 1 ~ 7. 3. 31	弥生時代竪穴住居跡・土坑・中世掘立柱建物跡・溝・土坑等	ナイフ形石器・有舌尖頭器・弥生土器・石斧・土師器等

県事業に伴う調査状況

本年度の県事業に伴う発掘調査は6件で、2件は県関係、4件は県教委関係の調査である。

空港跡地開発整備事業に伴う空港跡地遺跡の発掘調査は平成2年度より開始し、現在までに確定している事業計画における現地での発掘は本年度が最終年度となった。本年度の調査は、サンメッセ香川(産業交流センター)の南に位置する産業頭脳化センター建設予定地を3,800m²発掘した。調査の結果、中世後半を中心とする時期の掘立柱建物、溝、井戸等が検出され、屋敷地がいくつかに分割されている状況が観察され、中世の集落構造を知る上で貴重なデータとなった。

高松土木事務所建設に伴う多肥松林遺跡は高松桜井高校用地の南隣に当たり、本年度5,900m²の発掘調査を実施した。調査の結果、用地の中央から東部分にかけて、弥生時代から平安時代の遺物を出土する自然河川跡が検出され、用地西側から弥生時代と思われる破壊の著しい竪穴住居跡が検出された。高校新設に伴う発掘調査でみられなかった平安時代の墨書き土器が20点以上出土したことは注目できる。

高校(高松桜井高校)新設事業に伴う多肥松林遺跡の発掘調査は、平成4年度の予備調査に始まり、平成6年度は発掘の最終年度で調査対象地中央西側を3,590m²発掘した。調査期間は平成6年4月から9月までである。本遺跡は地形的には中央部分の南北に延びる自然河川とその両側の微高地とからなり昨年度調査では主に自然河川と東微高地とを調査し、本年度調査では主に西微高地を調査した。その結果、西微高地においても弥生時代後期の竪穴住居を2棟検出し、河川とそれを挟む微高地状の集落のあり方が確認できた。

三木町内の高校新設事業に伴う鹿伏・中所遺跡の発掘調査は、対象面積は13,041m²を測る。調査は用地買収の関係で平成6年7月より開始し、平成7年3月末日に終了した。調査はI期工事のうち最も工事を急ぐ北校舎・管理棟部分により着手した。この部分は集落のほぼ中央部分にあたり、弥生時代中・古墳時代初頭の竪穴住居跡を主体にした居住域と、土器棺群で構成される墓域を検出した。本年度の調査で最も注目される区域である。なお、本年度の調査では約70棟の竪

穴住居跡を検出している。高松平野南部の弥生時代の集落を研究するうえで、大変貴重な資料となつた。

陸上競技場建設に伴う平池南遺跡の発掘調査は、本年度より新たに開始したもので、調査面積は22,360m²で、このうち本年度は18,360m²（本調査17,880m²、予備調査480m²）を調査した。調査の結果、調査対象地北半部から縄文時代晚期、弥生時代前期・後期の遺構・遺物が検出され、從来弥生時代前期の集落跡である中の池遺跡しか知られていなかったこの地域の歴史を知るうえで大きな成果を得た。

歴史博物館建設に伴う高松城跡の発掘調査は、高松城東の丸跡に想定される地区において実施した。東の丸跡は、昭和60・61年度に実施した香川県県民ホール建設に伴う調査において、中世より近世にいたる数期の遺構面及びその遺構面上からは古図に記載されている建物遺構等を確認している。予定地の対象面積は5,000m²を測る。本年度の調査は北端の、面積1,000m²を測る小区分の調査及び掘の部分を含めた4本のトレンチ調査を実施した。なお、調査は複数遺構面のうち、上位遺構面のみを対象にして実施した。現地調査は平成6年4月より開始し、同年6月末に終了した。主要な遺構としては、江戸時代後期の石列状遺構及び礎石群、石組み溝状遺構及びその溝から分岐する石室状遺構を検出した。また、掘の部分の調査では香川県県民ホールより続く石垣を検出した。

遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間	遺構	遺物
空港跡地遺跡	高松市林町字新町2217-7	3,800	6. 4. 4 ~ 6. 8. 25	掘立柱建物、溝、井戸、出土水	土師質土器、国産陶磁器、輸入陶磁器、石・木製品他
多肥松林遺跡	高松市多肥上町1272	5,900	6. 10. 1 ~ 7. 3. 31	竪穴住居、自然河川、溝	弥生土器、土師器、須恵器、墨書き土器、八稜鏡、綠釉陶器
多肥松林遺跡	高松市多肥上町	3,590	6. 4. 5 ~ 6. 9. 6	竪穴住居、土坑、溝	縄文土器、弥生土器、須恵器、石器
施伏・中所遺跡	三木町鹿伏	13,041	6. 7 ~ 7. 3. 31	竪穴住居、掘立柱建物、土器棺、土坑、溝、自然河川	弥生土器、土師器、石器、鐵器、木製品
平池南遺跡	丸亀市金倉町・原田町	18,360	6. 5. 9 ~ 7. 3. 15	周溝墓、土器棺、溝、土坑、自然河川、出土水	縄文土器、弥生土器、木製品、石器、陶磁器
高松城跡	高松市玉藻町86番地他	1,000	6. 4 6. 6	石列状遺構、石組、溝、石室状遺構、石垣、掘	陶磁器、土製品、錢、瓦

香川県埋蔵文化財調査年報
平成 6 年度

平成 7 年 3 月 31 発行

編集 香川県教育委員会事務局文化行政課

高松市番町 2 丁目 1 番 10 号 NTT 番町ビル

電話 (0878) 31-1111

発行 香川県教育委員会

印刷 株式会社成光社